

支部長所信表明

九州大学大学院比較社会文化研究院 生物多様性講座

阿部 芳久

2009および2010年度に引き続き2011および2012年度支部長に再選されました阿部芳久です。『Pulex』の発行遅延により2009年12月発行の88号には矢田前支部長の御挨拶が掲載されました関係で、本号にて御挨拶を申し上げることになりました。最初に自己紹介をいたします。私は、タマバチの新種の記載や分類学的な校訂を行なうとともに、ホストレース形成や地理的単為生殖、アリとの共生などを研究してきました。外来種（研究対象はハモグリバエとインゲンテントウ）の生態の解明と防除に関する研究も行なっています。宿主である昆虫の性を操作してメスだけにしてしまう共生微生物（ボルバキアとリケッチア）についても論文を発表しました。

私が前期の支部長に就任した時、九州支部は財政や『Pulex』の発行に問題を抱えていました。しかし『Pulex』をPDF化して会員の皆様へメールに添付してお送りすることにより印刷および郵送費を削減し、財政の健全化を図る案が、2009年度の総会では審議してお認め戴きました。PDF化して配信するのであれば、印刷費を気にせずカラーの図も容量が大きくなる範囲で掲載可能になるという利点もあります。それから、九州支部の規約は1953年に施行されて以来、全く変更されたことがありませんでした。そのため実情にそぐわない条文がありましたので、2009年度の総会で一部の条文の表現の変更を提案し、御審議戴いた後、お認め戴きました。九州支部は1953年に設立された伝統のある支部ですが、時代に即した改革は必要であると、私は考えます。

今期の目標は九州支部の広報の充実です。この号にも紹介記事がありますように、現在、紙谷聡志さんが九州支部ホームページの開設に取り組んでくださっています。支部会員のみならず会員外の人びとも九州支部の活動を知って戴き、本支部に御支援をお願いできるのではないかと期待しています。

『Pulex』1号に初代支部長の江崎悌三先生が「支部活動を盛にして、会員の数を多くしていけば、それは日本の学界の隆盛をもたらすことになる」と書いておられます。このような精神は歴

代の支部長や支部幹事を始め会員の皆様に引き継がれ、今日に至りました。2009 および 2010 年度の支部大会と懇親会には広範な年齢層の会員が多数、御参加くださり盛況でした。支部幹事とともに私は会員の皆様から御指導・御鞭撻を賜りながら支部活動が少しでも盛んになるよう支部の運営に尽力してまいります。どうぞよろしく願い申し上げます。

2010 年 12 月 28 日

2009 年度活動報告

日本昆虫学会九州支部第 65 回例会

日本昆虫学会九州支部第 65 回例会は、2009 年 8 月 30 日（日）に日本鱗翅学会九州支部と合同で、伊都キャンパスに移転した九州大学大学院比較社会文化研究院において開催され、以下の 2 題の特別講演が行われた。講演終了後には新造された九州大学大学院比較社会文化研究院生物体系学教室の標本収蔵施設などの見学会も実施された。

1. トカラ列島におけるコガネムシ上科の生物地理（調査中） 細谷忠嗣（九大・院・比文）
2. アオバセセリ亜科の分類と生物地理 千葉秀幸（日本鱗翅学会）

日本昆虫学会九州支部第 57 回大会

日本昆虫学会九州支部第 57 回大会は日本鱗翅学会九州支部との合同大会として、2009 年 12 月 5、6 日（土、日）に別府市の「かんぼの宿 別府」にて開催され、以下の特別講演 2 題と 9 題の一般講演があった（発表者の所属は当時のものである）。

特別講演

1. 昨今昆虫事情・・・大分県 三宅 武（日本鱗翅学会九州支部長、大分昆虫同好会）
2. チョウのモニタリング —福岡における 19 年間を振り返って 矢田 脩（九大・院・比文）

一般講演

1. シロダモタマバエ（双翅目：タマバエ科）の寄生蜂相 ○松尾和典（九大・院・生資環・昆虫）・湯川淳一（九大）・徳田 誠（九大・高推セ）

寄生蜂類は寄主昆虫の個体群動態に重要な役割を果たしているが、同定や生活史の特定が困難なため、未解明の点も多く残っている。しかしながら、ゴール形成者の寄生蜂は、定期的なゴール採集と解剖によって羽化時期や寄生時期などが特定しやすく、寄生率や個体群密度が調査しやすいために、上記の困難さを克服することができる研究対象である。これまでシロダモタマバエ

(ハチ目：タマバエ科)の寄生蜂として、内部寄生蜂の *Gastrancistrus* sp. (ハチ目：コガネコバチ科) と外部寄生蜂の *Bracon tamabae* (ハチ目：コマユバチ科) という、対照的な戦略をもつ寄生蜂が共存しており、生物間相互作用を研究する上で非常に興味深い。しかし、内部寄生蜂の *Gastrancistrus* sp. は種の同定に至っていないこと、また、2009年4月、伊豆半島での調査から、新たに、外部寄生蜂の *Sigmophora* sp. (ハチ目：ヒメコバチ科) が得られており、寄生蜂の未同定が、生物間相互作用の研究の障害となっている。そこで、本研究では、今後の研究の基盤とするために、これらの寄生蜂の同定を試みた。形態観察の結果、*Gastrancistrus* sp. は、胸部の表面彫刻や前翅の特徴から既存のどの種群にも入らない未記載種であることが分かった。*Sigmophora* sp. は、オス触角の特徴から未記載種であることが分かった。

2. 八丈島と三宅島のシロダモタマバエ個体群：分布域の変化と生存率の比較 ○徳田 誠 (九大・高推セ)・松尾和典 (九大・院・生資環・昆虫)・湯川淳一 (九大)

様々な自然現象が生物個体群に及ぼす影響を評価するには、その現象が生じる前後のデータを比較する必要がある。しかしながら、事前の予測が困難な自然現象に関しては、以前のデータを得ることが不可能な場合も多い。本研究では、1970年代末の分布や生息密度の記録がある八丈島と三宅島のシロダモタマバエ個体群に着目し、2000年の三宅島雄山の噴火がタマバエ個体群にどのような影響を及ぼしたのかを調査した。2009年の調査では、30年前と同様、三宅島では標高250m以上、八丈島では標高300m以上の地域にしかタマバエは分布していなかった。かつて多数のゴールが確認された三宅島の標高360m以上の地点では、雄山の噴火により、タマバエ個体群は寄主のシロダモもろとも消失していた。三宅島の標高250m以上の地点では、30年前には全調査株でシロダモタマバエによるゴールが確認されたが、2009年の調査では2%の株でしか確認されなかった。八丈島と三宅島でシロダモタマバエの生存率を比較した結果、三宅島では、1齢幼虫期の発育不良や2～3齢期のゴールの枯死による死亡率が有意に高く、現在も続く火山活動により、タマバエ幼虫の死亡率が高まっている可能性が示唆された。以上の結果から、雄山の火山活動がシロダモタマバエ個体群に与えた影響は甚大であり、三宅島においてシロダモタマバエ個体群が著しく衰亡した主要な要因であると考えられた。

3. 日本産 *Dimorphopterus* 属 (カメムシ亜目, ナガカメムシ科) の分類学的研究

○澤田宗一郎 (九大・農・昆虫)・紙谷聡志 (九大・院・農・昆虫)

ナガカメムシ科コバネナガカメムシ亜科は、世界から約50属385種、日本から6属11種が記録されている。日本で最も種数の多い属は、*Dimorphopterus* 属であり、ヒメコバネナガカメムシ *D. bicoloripes*, キュウシュウコバネナガカメムシ *D. gibbus*, ニッポンコバネナガカメムシ *D. japonicus*, コバネナガカメムシ *D. pallipes*, ヤクコバネナガカメムシ *D. yakuensis* の5種が知られている。

しかしながら、本属は野外調査が不十分なため、日本におけるファウナが解明されていない上

に、種間の形態的差異が乏しく、種の同定が困難である。今回、北海道から九州においておこなった野外調査によって得られた標本の前脚腿節、メス受精囊の形態を比較し、検討を行ったところ、日本に7種分布していることが確認できた。これらの前脚腿節は、雌雄二型と雌雄同型の2タイプに大別できた。受精囊は basal flange と pump/bulb の発達程度によって各々3タイプと2タイプに大別できた。

4. 九州産クワキヨコバイ属の分類学的研究 ○神代 瞬(九大・農・昆虫)・紙谷聡志(九大・院・農・昆虫)・奥寺 繁(九大・院・生資環・昆虫)

クワキヨコバイ属は東アジア(極東ロシア、中国、朝鮮半島、日本)および北米に分布しており、世界全体から96種、東アジアから92種、日本から70種が記録されている。本属は特に日本で種分化が進んだ分類群で、日本産の未記載種を含めると200種以上存在するといわれている。本属の分類を体系的に行うために、類似する形質をもつ種同士を「種群」としてまとめる考え方が採用されており、現在22種群に分類されている。本属の研究は関東を中心とした調査が行われてきたが、九州の調査は福岡県や佐賀県、長崎県など北部が中心であった。そのため、熊本県や宮崎県、鹿児島県など中部～南部九州での調査が不足しており、九州では6種群9種が確認されているのみであった。そこで本研究では、調査が不足している中～南部九州を中心に、九州の計127箇所(島嶼を除く)で採集を行った。その結果、九州に分布するクワキヨコバイ属は7種群15種であることを確認した。また、各種の分布は4つの様式(九州の北部、西部、南部、全域)が認められた。このうち、九州の北部と南部に分布する種は、中央構造線形成の際の断層運動による南北の植物相の変化によって分布域が隔てられた可能性がある。

5. 日本産ハナバチ類のDNAバーコーディングに関する研究 ○堀江ちひろ(九大・農・昆虫)・多田内 修(九大・院・農・昆虫)

DNAバーコーディングとは、特定の短い塩基配列を生物の検索・同定に用いる方法である。DNAの塩基配列は専門知識なしに観察でき、またコンピューターを使って簡単に検索できるため、生物学的情報を集積・検索するための支援ツールとして注目されている。ハナバチ類は作物・果樹の有効な花粉媒介(送粉)昆虫で、食料生産に重要な生物であり、さらに野生植物にとっても貴重な送粉者で、とくに中央アジアなどの温帯半乾燥地域では、送粉に欠かせない生物である。ハナバチ類が農業や植物保全に重要ということから、2008年5月、国際的な連携体制が構築され九大昆虫学教室でも昨年度より取組みを開始した。日本産ハナバチ類は6科33属417種が記録されており、その6科には、ムカシハナバチ科(2属)、ヒメハナバチ科(2属)、コハナバチ科(6属)、ケアシハナバチ科(3属)、ハキリバチ科(7属)、ミツバチ科(13属)が含まれる。日本産ハナバチ類については、かなりの程度で形態分類が終了しているが、近縁種の同定や同胞種の疑い、同一種の季節型の疑い等、問題のある種群が存在し、DNAレベルで検討する必要がある。とくにヒメハナバチ科 *Andrena* 属の *A. munakatai* については、*A. komachi* との間

種が発見されているが、バーコードを用いて、形態分類とどう対応するか検討する必要がある。本研究では、DNA バーコード領域を用いた分子生物学的解析を行い、日本産ハナバチ類においてDNA バーコード領域を用いた種レベルでの同定・検索が有効かどうかを検討した。

6. クサアリ亜属 *Dendrolasius* の分類と進化 ○藤原希美 (九大・農・昆虫)・丸山宗利 (九大・総合博)

クサアリ亜属 *Dendrolasius* はヤマアリ亜科 Formicinae, ケアリ属 *Lasius* に属し、北半球の温帯から亜寒帯にかけて広く分布するアリの一群である。日本からは5種が記録されているが、働きアリの形態による同定はアリの専門家でも難しく、分布情報の集積等に支障をきたしている。この点において、クサアリ属ではDNAバーコーディングを用いた同定がきわめて有用であると考えられる。とくにクロクサアリ *L. fuji* については、ヨーロッパ産の *L. fuliginosus* からの独立性や隠蔽種の問題が認められ、DNA解析による同定と分類学的研究は必要不可欠である。またクサアリ類は、各種で営巣習性に違いがあり、女王の形態差が顕著であるなど、系統進化の材料としても好適である。本研究では、mtDNAのCOI領域の塩基配列の一部を用いて系統解析を行い、クサアリ類の分類学的検討と進化的考察を行う。

7. ヤエヤママルバネクワガタの交尾後に排出されるゼリー状物質の正体 横川忠司 (九大・院・比文)

ヤエヤママルバネクワガタでは交尾後にメスの陰門から白いゼリー状の物質(カプセル)が排出される。しかし、このカプセルの内容物や由来、どういときに排出されるのかについては不明である。そこで、カプセルと交尾行動を観察した。その結果、(1)カプセルには精子とゼリー状の物質が含まれること、(2)カプセルの精子活性は死後直後のオスから採取した精子活性より低いこと、(3)交尾後にカプセルが排出される場合とされない場合の両方があり、メスの初めての交尾では排出されないこと、(4)排出される場合にオス交尾器引き抜き時と引き抜き後の場合があることがわかった。これらの結果から、カプセル内の精子はメスが直前に交尾したオス由来であること、オスがカプセルを排出しているあるいはメスも排出している可能性があることを示唆した。今後、カプセル内容物の由来、複数回交尾したメスから産まれた子の父性などを明らかにし、カプセルを作る意義について検討する予定である。

8. トカラ列島および三島村 2009年調査で採集されたコガネムシ上科甲虫 ○細谷忠嗣・土居朋嵩 (九大・院・比文)・棚橋薫彦 (東大・農)

トカラ列島は、屋久島と奄美大島の間に南北160kmに渡って連なる島々からなる弧状列島であり、動物地理学における旧北区と東洋区の境界である渡瀬線が位置している。鹿児島県三島村は、九州の薩摩半島と大隅諸島の屋久島および口永良部島の間に浮かぶ島々からなり、昆虫類(特にチョウ類)の分布に基づき、動物地理学的境界(旧北区と東洋区の境界)として三宅線が引かれている地域である。これらの生物地理学上重要な地域のコガネムシ甲虫相調査を2009年7月か

ら8月にかけて、ルッキングやバナナトラップ、ライトトラップ、朽ち木割りなど各種採集法を用いて行ったので、その結果を報告する。トカラ列島では、中之島18種、宝島13種、小宝島9種を採集し、このうち中之島1種、小宝島8種が各島における新記録種であった。さらに、口之島港にフェリーが停泊中に飛来した1種が口之島新記録種であった。また、2008年に宝島の民宿内で1個体のみ始めて採集された外来種であるヤエヤマニセツツマグソコガネが、宝島で大量発生していること、他の島にも侵入していることが確認された。三島村では、硫黄島8種、竹島7種、黒島10種の合計15種を採集した。三島村での初記録であるフチケマグソコガネを竹島で採集した他、硫黄島3種、竹島1種の島新記録種を確認した。

9. メンガタズメ属2種が盗蜜できる根拠：音声擬態の実験 ○上宮健吉(久留米大・比較文化研)・大谷 剛(兵庫県立大・自然環境科学研)

ズメガ科メンガタズメ属の世界の3種は胸背のドクロ面形の怪に加えて、触ると金切り声を発することで著名である。Busnel & Dumortier (1959)は、セイヨウメンガタズメの音響特性を初めて明らかにし、発音は昆虫の中で唯一、口腔内の空気流が下咽頭弁を振動させて生じると説明した。また、Tutt(1904)はメンガタズメが巣内で連続的に発音すると報告し、発音はミツバチの巣内の盗蜜に関係するという説が広まった。一方、ガは果実や樹液を得ており、ハチの巣に入ることはないという反論もある。養蜂家の話では、クロメンガタズメの成虫がセイヨウミツバチの巣箱内や、巣箱前に設置されたオオズメバチの捕獲トラップで死体で見つかるという。よって、巣を訪問することは明白で、巣箱内の死体は蜂蜜の過剰摂取により、脱出できない結果であり、容易に伸展しない口吻は訪花よりも、盗蜜が適応的であるとか、その行動とワーカーの攻撃との関係が話題になる。我々は20年以上前から、メンガタズメがワーカーの攻撃を受けないのは発音行動が関係すると予測し、1枚の巣板を用い、最盛期に500頭余のワーカーと1頭の女王バチ、3頭の女王候補と60頭余の雄バチのコロニーから、巣内の各種の発音を録音した。また、クロメンガタズメ(日本産、ネパール産)とセイヨウメンガタズメ(フィレンツェ産)の現地での録音を行い、双方の音声データを解析した。その結果、上記2種のメンガタズメの発音と、ミツバチ女王のパイピング音との間に共通する音響特性を見いだした。そこで、女王の発するパイピング音を録音し、巣内で再生すると、加振器により巣板を強制振動させた場合のみ、再生の間だけワーカーは静止した。次に、その特性を反映した合成信号を作成し、巣板に振動を与えると、ワーカーは同じく一斉に静止し、その特性平均値からはずれるほど、ワーカーのフリーズの割合が低下した。この結果、メンガタズメ属の発音は、盗蜜を目的にした、ワーカーの攻撃行動を制御するミツバチ女王のパイピングの音声擬態であり、巣の侵入に成功するのは体表の類似脂質成分に起因するとするMoritz(1991)の匂い説だけではないという証拠を得たと考える。

2009 年度会計監査報告

日本昆虫学会九州支部 2009 年度会計報告 (2009 年 12 月 29 日締)

収入	前年度 (2008 年 12 月 13 日締) 繰越分	189,892 円
	会費収入	39,000 円
	合 計	228,892 円
支出	支部長選挙発送費	12,480 円
	会員異動調査票発送費	30,000 円
	第 65 回支部例会 (福岡) 案内発送費	2,200 円
	第 57 回支部大会 (別府) 案内発送費	1,900 円
	事務費	16,879 円
	Pulex No. 88 印刷費	49,500 円
	Pulex No. 88 発送費	12,528 円
	合 計	125,487 円
	差引残高	103,405 円

上記のとおり相違ありません。

2010 年 3 月 31 日

会計監査

徳田 誠



2010 年度活動報告

日本昆虫学会九州支部第 66 回例会

日本昆虫学会九州支部第 66 回例会は、2010 年 8 月 29 日 (日) に、九州大学箱崎キャンパスにおいて開催され、以下の 2 題の特別講演が行われた。講演終了後には九州大学総合研究博物館の標本収蔵施設などの見学会も実施された。

1. ハネカクシから好蠟性昆虫、そしてアリへ 丸山宗利 (九州大学総合研究博物館)
2. 昆虫が植物細胞の生殺与奪の権限を掌握している?—エゴノキハイボタマバエによる植物細胞制御とそのメカニズム— 徳田 誠 (九州大学高等教育開発推進センター)

日本昆虫学会九州支部第 58 回大会

日本昆虫学会九州支部第 58 回大会は日本鱗翅学会九州支部との合同大会として、2010 年 12 月 4 日（土）に九州大学箱崎キャンパスにて開催され、以下の特別講演 1 題と 9 題の一般講演があった。

特別講演

- ・ **博物館建設に従事した 30 年** 上田 恭一郎（北九州市立いのちのたび博物館（自然史・歴史博物館）学芸担当部長）

一般講演

1. **X 線 CT スキャンを用いたアリ類の骨格筋肉系の把握** ○細石真吾（九大・熱研セ）・佐々木 理（東北大・学術資源研究公開セ）・ヨハン ビレン（リューベン大）

これまで、アリ類の内部形態については、直接的な解剖とパラフィン／樹脂を用いた包埋切片標本によって観察されていることが多いが、近年 X 線 CT スキャンを用いて立体的に視覚化して観察する例が見受けられる。それによると筋肉の起点・付着点を明瞭に認識できるだけでなく、その機能形態的なメカニズムを三次元的なイメージングから類推することが可能である。本講演では、シリアゲアリ類を対象としたこれまでの比較形態の研究成果を参考にしながら、X 線 CT スキャンを用いて得られた図をいくつか紹介するとともに、今後発展していくと思われる研究テーマについて考察したい。

2. **キバナヒメハナバチ種群の分類学的再検討** ○加冷麻美（九大・農・昆虫）・多田内 修（九大・院・農・昆虫）

ヒメハナバチ科ヒメハナバチ属の *Chlorandrena* 亜属に属するキバナヒメハナバチ種群 *knuthi* species group は、日本ではキバナヒメハナバチ *Andrena knuthi* Alfken, 1900（以下キバナ）と、ミナミキバナヒメハナバチ *Andrena okinawana* Matsumura et Uchida 1926（以下ミナミ）の 2 種が知られている。この 2 種は訪花植物もほぼ同じであり、互いに極めてよく似た形態的特徴を持っている。かつて日本国内ではキバナが日本本土、ミナミが南西諸島と異所的に分布していたことから 1960 年に種 *knuthi* の 2 亜種とされた。しかしその後、対馬南部の一部の地域でミナミが混生していることが明らかになり、1982 年に別種に戻された。

本研究では、対馬で 1987 年以降この 2 種の分布調査を行っていないため、その後の分布を明らかにするとともに、採集された個体の DNA バーコード領域を調べて 2 種の間関係を明らかにすることを目的とした。また、九州大学に所蔵されている 2 種の標本について形態の再検討を行った。

その結果、対馬の北部でもミナミのメスと思われる個体が採集された。また、採集された個体

の DNA から系統樹を作成したところ、九州のキバナと対馬のキバナが同一のクレードに収まり、対馬で採集されたミナミと思われるメスの個体は違うクレードを形成したことから、2種は別種である可能性が高まった。そして過去の標本の再検討からは、オスの識別に用いる *paraocular area* の下部の黄色紋の有無と、オスメス両方の識別に用いる前伸腹節三角状部の皺に変異がみられ、九州や本州のキバナのオスにもミナミと同様な黄色紋を持つ個体が存在しているため、今後種内変異を精査する必要がでてきた。

3. オカダクワキヨコバイとその近縁種に関する分類学的研究 ○久富倫子 (九大・農・昆虫)・紙谷聡志 (九大・農・昆虫)・奥寺 繁 (九大・農・昆虫)・神代 瞬 (九大・院・生資環・昆虫)

カメムシ目ヨコバイ科に属するクワキヨコバイ属 *Pagaronia* Ball は、極めて多様な交尾器形態を示す分類群である。現在世界で101種が知られ、その内74種は日本に分布しており、特に日本で多様化が進んだ分類群である。しかし、日本において約160種の未記載種が確認されており、さらなる分類学的研究が必要である。本属のオカダクワキヨコバイ *P. okadai* Anufriev は、雄交尾器の *aedeagal shaft* 中央に、左右に広がる葉状片という形質を有し、これが本種の重要な分類形質とされてきた。ところが最近の調査で、山口県と長崎県から小さいながらも葉状片を持つ未記載種が確認されたため、これら2未記載種と *P. okadai* について分類学的検討が必要となった。本研究では *P. okadai* の分布が確認されている高知県、山口県、及び九州地方で調査を行い、*P. okadai* と上記2未記載種を含む近縁種について雄交尾器の形態比較を行った。また、DNAバーコードとして種同定に用いられているミトコンドリアDNAのCOI領域を用いた分子系統樹を作成し、形態・分子の2つの観点から種を考察した。その結果、雄交尾器 *aedeagus* の形態比較により、*P. okadai* を含む2既知種と4未記載種を確認した。分子系統樹では、6つのクレードを形成し、一部の種については形態分類を支持せず形態種を混在する結果となった。葉状片が確認されていた2未記載種のうち、山口県産種は *P. okadai* とは異なる別種として認め、長崎県産種は *P. okadai* の一変異とするのが妥当であると考えた。

4. 九州大学旧六本松校舎建築物内並びに周辺飲食店で発生が認められたノミバエ (双翅目:ノミバエ科) ○中山裕人 (九大・院・比文)

ノミバエは生活史が多様で種類が多いことで知られるが、その内の何種かは、建築物内で発生をくりかえす家屋害虫、衛生害虫である。これらの種類は工場内の製品パッケージに混入して問題になったり、食品とともに摂取され、消化器系蠅蛆症をおこす。日本で家屋害虫、衛生害虫として知られている代表的な種はコシアキノミバエ *Dohrniphora cornuta* Bigot、クサビノミバエ *Megaselia scalaris* Loew、オオキモンノミバエ *Megaselia spiracularis* Schmitz の3種であるが、これら3種の九州での分布や生活史には不明な点が多かった。そこで、1999年から2008年の間、福岡市の九州大学旧六本松校舎と周辺の飲食店で発生しているノミバエを調査した。

その結果、上記3種を発見することができた。コシアキノミバエは旧六本松校舎建築物内の至る所で見られ、周辺飲食店でも最も普通に認められた。しかし、本種は校舎の庭や近隣の南公園でも多数採集されたので、外から侵入する個体も多いものと推定された。一方、クサビノミバエは校舎内の昆虫を飼育している研究室で特異的に多く観察されたが、近隣飲食店では一例の確認にとどまった。また、オオキモンノミバエは校舎建築物内ではまったく発見できなかったが、近隣飲食店のひとつで多数の発生が認められた。3種のうち、クサビノミバエとオオキモンノミバエはより人家性の強い種類であると考えられた。

加えて、上記3種に準じてヒト親和性が比較的高いと考えられるマルノミバエ *Puliciphora tokyoensis* Kinoshita並びに *Chonocephalus aduncus* Schmitz の2種が六本松校舎敷地内の土壤に撒かれた腐敗サナギ粉に多数誘因された。しかし、これら2種は建築物内部では発見できなかった。

5. トカラ列島 2010年調査で採集されたコガネムシ上科甲虫 ○細谷忠嗣（九大・院・比文）・棚橋薫彦（産総研）・村井悠孔（九大・院・比文）・藏満司夢・小長谷達郎（筑波大・生命環境）・栗田和紀（京大・院・理）

トカラ列島は、屋久島と奄美大島の間に南北160kmに渡って連なる島々からなる弧状列島であり、動物地理学における旧北区と東洋区の境界である渡瀬線が位置している。発表者の一人である細谷は、2008年から十島村より採集許可を受けてコガネムシ甲虫相の調査を継続して行っており、コガネムシ上科甲虫のトカラ列島への侵入史に関する調査を進めている。コガネムシ上科甲虫は、すでに発表した2008年調査の結果（細谷ら、2009）を含めて、本列島からこれまでに5科58種が報告されている。2010年調査は、7月から8月にかけて中之島、臥蛇島（現在無人島）、小宝島、諏訪之瀬島、平島の5島でルッキングやライトトラップ、バナナトラップ、朽ち木割りなど各種採集法を用いて調査を行った。今回の発表では臥蛇島を除いた有人島の調査結果について報告する。2010年調査の結果、中之島24種、小宝島16種、諏訪之瀬島11種、平島12種を採集し、このうち小宝島6種（2009年調査で新記録され、2010年調査でも採集された8種を除く）、諏訪之瀬島1種、平島8種が各島における新記録種であった。また、外来種であり近年琉球列島を北上して分布を拡大しているヤエヤマニセツツマグソコガネ *Ataenius picinus* は、中之島ですでに定着していると考えられた。また、小宝島のライトトラップにも大量に飛来し、さらに平島でも新たに確認された。本種のトカラ列島における分布拡大・定着がさらに進行していることが確認された。

6. 分布南限、鹿児島県のミズイロオナガシジミの現状 ○中峯浩司（鹿児島市）・福田晴夫（鹿児島市）・中峯敦子（鹿児島市）

ミズイロオナガシジミ *Antigius attilia* が鹿児島県で初めて記録されたのは1950年、大隅半島北部の志布志である。その後、霧島山を含む県北東部にかけて多産地がいくつか見つかると、大隅

半島南端からも記録された。しかしその後、かつての産地からの記録は減り、安定して発生が見られた栗野岳山麓のカシワ・クヌギ混合林でも、ウスイロオナガシジミの激減とともに本種は減少した。

消滅や激滅の理由は、やはり温暖化なのだろうか。それを確かめるため、1952年に江崎悌三氏らによって南限記録となった大隅半島南端の旧佐多町を調査した。結果、予想に反して52年ぶりに本種の生息を確認することができた。海を間近に見下ろすクヌギ林に生きながらえたことは、本種の激滅の原因が温暖化ではないことを示唆している。本種減少の原因はクヌギ林の管理の方法が変わったためか？ 鹿児島県の西半分に分布しないことなど、鹿児島県におけるミズイロオナガシジミの問題点についても併せて報告する。

7. セセリチョウ科アオバセセリ属 *Choaspes* の分子系統 (予報) 劉郁伶 (國立臺灣師範大)・〇千葉秀幸 (ビショップ博物館)・徐堉峰 (國立臺灣師範大)

千葉の形態と生物地理によるアオバセセリ亜科Coeliadinaeの分類は、一定の評価を得たものの、一方で主観的で説得力に欠けるとの批判も受けている。これに応えるため、アオバセセリ亜科各属の分子系統解析を行っているが、そのうち今回はアオバセセリ属について現在までに得られた結果を発表する。

アオバセセリ属8種22亜種のうち、千葉により提案された4つのグループを含む7種12亜種32個体を調べた。残りの1種 *C. plateni* については、新鮮な材料を入手することができなかった。使ったのは、ミトコンドリアDNAのCOIおよびCOII領域を含む約2000~2300塩基対で、近隣結合(NJ)法により系統樹を構築した。

構築された系統樹は概ね千葉の提案したグループや種の単系統性を支持した。しかし、比較形態からでは推測がむずかしい、したがって分子系統に頼らざるを得ないグループ内の分岐については満足な結果が得られていない。

8. 福岡市九大六本松キャンパスとその周辺におけるチョウのモニタリング 〇矢田 脩 (九大・総合研究博物館)

1990年から20年近くにわたって、演者は九州大学六本松キャンパスとその周辺のチョウの観察とモニタリングを行ってきた。おもに、九大における野外授業を通してデータを蓄積してきたが、この間、日本鱗翅学会ならびに博多昆虫同好会の会員の皆さんにも協力いただいた。データはいまだ全体をまとめるに至っていないが、同地のチョウの生息地の改変にあたって重要と思われる点について指摘しておきたい。

六本松キャンパス内(北東部分、“区間10”)に限ってみると、1992-95年のデータでは総計29種が記録されており、個体数も他の区間(六本松~南公園)に比べてとくに少なくなかった。ただし、その当時記録されたサツマシジミ、サトキマダラヒカゲ、あるいは一時的に発生したミズイロオナガシジミ(福岡県RDB種)など森林性のチョウは、その後まったく見られなくなった。一方、

食草のウマノスズクサが残っているためか、ジャコウアゲハは現在(2010年9月)も生き残っている。

この六本松キャンパスは、福岡市の中心部に位置しながら旧制福高開設以来 90 年近くキャンパスとしての自然が保たれてきた。しかし、2010年3月には九大から都市再生機構 (UR) に売却され、目下、建物の解体、周囲・敷地内道路・広場などが整備されつつある。いずれ、南半分は法曹関係、北半分は民間(主にマンション業者)に売却される予定とのことである。

福岡市全体からみると、六本松キャンパスは西公園、大濠公園、南公園、油山とつながる緑の回廊の一部であり、長年チョウをはじめとする生きものたちの生息地・中継地として存在してきた。それゆえ、今後の六本松九大跡地の改変にあたって、現在の植生とそれをよりどころとするチョウをはじめとする生きものたちの生息地を残すことはきわめて重要かつ緊急の課題といえよう。

9. GigaPan を用いた標本 ” 箱 ” イメージ・データベースの構築と公開 ○紙谷聡志 (九大・農・昆虫)

九州大学昆虫学教室ではタイプ標本に関して、九州大学昆虫学教室所蔵タイプ標本データベース (ELKUType) として公開している。また、ハナバチ類とトビコバチ類についても、データベース (HANABACHI, TOBIKOBACHI) を公開している。このため、これらの標本は貸し出し依頼に迅速に対応することができる。しかし、その他の一般標本に関しては約300万点の標本数を誇るとはいえ、属や種の同定がされていないものがほとんどで、場合によっては科などの分類群にさえソーティングされておらず、十分に整理されているとは言い難く、標本の貸し出し依頼には全く答えられない状況にある。そのため、目的の標本があるか無いかを確かめるためには、現地で確認するしか方法がなかった。しかし、デジタルイメージ処理技術の飛躍的な向上により、この問題が解決できるようになった。その一つの方法がGigaPanを用いた標本箱イメージ・データベースである。GigaPanとは、自動カメラ架台+パノラマ写真合成ソフト+写真の表示・共有ウェブサイトから成るシステムのことであり、これを用いると、標本箱内の各標本を高解像で閲覧することが可能になる。試験的に、<http://www.gigapan.org/>にて公開を行う。

日本昆虫学会九州支部 2010 年度会計報告 (2010 年 12 月 27 日締)

収入	前年度 (2009 年 12 月 29 日締) 繰越分	103,405 円
	会費収入	2,000 円
	第 58 回支部大会 (福岡) 参加費繰入	10,205 円
	第 58 回支部大会 (福岡) 懇親会費繰入	6,451 円
	合 計	122,061 円

支出	会誌追加発送費	140 円
	第 66 回支部例会（福岡）案内発送費	750 円
	第 58 回支部大会（福岡）案内発送費	750 円
	支部会長選挙関連費	15,500 円
	事務費	1,080 円
	<hr/>	
	合 計	18,220 円
差引残高		103,841 円

日本昆虫学会九州支部長選挙結果

任期満了に伴う日本昆虫学会九州支部長選挙（2010 年 12 月 10 日公示，12 月 24 日投票締切）が実施された。開票作業は，12 月 27 日に阿部芳久支部長，細谷忠嗣会計幹事，館卓司会員の立ち会い（荒谷邦雄庶務幹事は海外調査で不在）の下に行われ，投票総数 46 票（すべて有効票）の開票結果は，阿部芳久氏（23 票），荒谷邦雄氏（5 票），多田内修氏（4 票），上田恭一郎氏（2 票），山根正気氏（2 票），緒方一夫氏（1 票），紙谷聡志氏（1 票），佐々木健志氏（1 票），鷗洪氏（1 票），高木正見氏（1 票），館卓司氏（1 票），立田晴記氏（1 票），津田勝男氏（1 票），丸山宗利氏（1 票），湯川淳一氏（1 票）であった。この結果，阿部芳久九州大学教授が次期日本昆虫学会九州支部長に選出された。

- 原 著 -

380 (Ort.: Eneopteridae) アオマツムシを対馬で採集

沢田佳久（兵庫県博）

日本国内で分布を拡げたアオマツムシ *Truljalia hibinonis* (Matsumura) に関して，長崎県本土では 1996 年に採集されている（島本，1998）が，対馬からは未記録である。筆者は今回，対馬で本種を採集したので報告する。

1♀，長崎県美津島町脇見ノ浦，2003 年 12 月 2 日。

採集地は海岸の砂浜である。発見した時点で既に死んでいたが，触角や脚が柔らかく破損も少ない事から漂着したものとは考え難く，現地に生息しているものが死亡した直後であろうと思われた。なお標本は兵庫県立人と自然の博物館に収蔵される。

末筆ながら既報の探索に御助力いただいた紙谷聡志氏，布袋厚氏，松田享氏に御礼申し上げます。

す。

[参考文献]

島本 勤 (1998) 長崎県におけるアオマツムシの記録. *こがねむし*, 60: 44.

(編集部注: この原稿は 2004 年 1 月に投稿された.)

381 (Col.: Curculionidae) 沖縄本島で採集されたトゲムネサルゾウの一種

沢田佳久 (兵庫県博)

兵庫県立人と自然の博物館において行われた同定会の際, 注目すべき標本が含まれていた. 九州大学の吉武啓氏に同定をお願いしたところ, 下記の結果であったので報告する.

Mecysmoderes consularis (Pascoe) (Fig.1)

採集地: 沖縄本島本部半島エメラルドビーチ

採集日: 2003 年 8 月 12 日

採集者: 吉田紀亜

本種は台湾原産で長らく生態が不明であったが, 現地ではハナミョウガ属の花蕾を加害することが最近になって判明した (吉武, 2002). 本邦からは未記録だが, 沖縄本島那覇市首里からの標本も存在するとの事である.

発表を委ねられた吉田紀亜氏, 快く同定の労をとって下さった吉武啓氏に末筆ながら厚く御礼申し上げます.

[参考文献]

吉武 啓 (2002) ショウガ類の花蕾を食害す

るサルゾウムシについて. *Pulex*, (87):

479-480. (講演要旨)

(編集部注: この原稿は 2004 年 1 月に投稿された.)



Fig. 1. *Mecysmoderes consularis* (Pascoe).

382 (Hem.: Cicadellidae) シロオオヨコバイを鹿児島県大隈半島で採集

奥寺 繁・三田敏治* (九大・農・昆虫)

*現在の所属: 東農大・農・昆虫

シロオオヨコバイ *Cofana spectra* (DISTANT, 1908) はオオヨコバイ亜科 Cicadellinae に属

し、日本では奄美大島以南の琉球列島で普通にみられる。本種は、過去に本州、四国、九州および屋久島においても記録されていたが、いずれも同族のオオヨコバイ *Cicadella viridis* (LINNAEUS, 1758) と誤同定された可能性が高く、これらの分布は疑わしいとされてきた(林, 2002)。しかし、筆者らは鹿児島県大隈半島においてシロオオヨコバイを採集したので、九州本土からの確認記録として報告をする。

[標本採集データ] 5♂ 1♀, Hamajiri, Minami-ôsumi, Kagoshima Pref. (鹿児島県肝属郡南大隅町浜尻), 16. XI. 2007, T. MITA leg.

採集地は砂浜の広がる海岸付近の乾燥した草地で、同じ場所から同時にオオヨコバイも採集された(図1)。オオヨコバイは日本では北海道から屋久島まで分布しており、またシロオオヨコバイは屋久島以北の記録が疑問視されてきたことから、これまで両種の分布は異所的であろうと考えられていた。そのため、今回両種が同時に採集されたことは非常に興味深い。今後、シロオオヨコバイの九州南部や大隈諸島での分布記録を見直す必要がある。

[引用文献]

林 正美 (2002) Homoptera ヨコバイ目 (同翅目), Auchenorrhyncha 頸吻亜目. 琉球列島産昆虫目録 (東 清二監修), 沖縄県産生物目録シリーズ1増補改訂, pp. 97-112. 沖縄生物学会. (編集部注: この原稿は2008年3月に投稿された.)

383 (Hem.: Blissidae) 福岡県宗像市沖ノ島から新たに記録されるカメムシ

澤田宗一郎(九大・院・生資環・昆虫)・紙谷聡志(九大・院・農・昆虫)

福岡県宗像市に属する沖ノ島は、周囲が約4km、面積は約1km²の小さな島で、九州本土から約60km離れた場所に位置する。本島の大部分はタブノキやヤブニッケイの原生林で覆われており、「沖の島原始林」として国の天然記念物に指定されている。

これまでに、沖ノ島からコバネナガカメムシ科の記録は報告されていなかったが(宮田 1977, 宮田ら 1977, 荒巻ら 1983), 1933年の江崎・堀の調査, 1998年の森本の調査, 2010年の三枝・



図1. 南大隅町で採集されたシロオオヨコバイ(a)とオオヨコバイ(b).

矢田・紙谷の調査で採集された九州大学農学部に所蔵されているカメムシ類の標本の中に本科の標本が含まれていたため、報告を行う。

Blissidae コバネナガカメムシ科

Macropes obunibilus (Distant, 1883) ホソコバネナガカメムシ

8♂ 7♀, 20-21 V 1933, Esaki & Hori; 3♂, 20-21 V 1998, K. Morimoto; 2 nymphs, 1♂, 2 VI 2010, S. Kamitani; 1 nymph, 3 VI 2010, S. Kamitani.

本報告を行うにあたり、貴重な標本を観察する機会を与えていただいた 森本 桂名誉教授(九州大学)、2010 年に行った沖ノ島調査において様々な便宜を図っていただいた三枝豊平名誉教授(九州大学)ならびに矢田 脩名誉教授(九州大学)に深謝の意を表します。

[参考文献]

荒巻健二・福田 治・今泉 晃 (1983) 筑前沖ノ島採集記. *Korasana*, 19: 79-80.

宮田 彬 (1977) 筑前・沖ノ島の昆虫相について, 沓岐の生物: 539-548. 長崎県生物学会, 長崎.

宮田 彬・茂木幹義・瀬戸屋耕二・山本 優 (1977) 筑前・沖ノ島産昆虫目録, 沓岐の生物: 561-594. 長崎県生物学会, 長崎.

(編集部注: この原稿は 2010 年 11 月に投稿された.)

384 (Hym.: Formicidae) 平尾台から発見された特筆すべきアリ類について

レ ゴック アイン・細石真吾・緒方一夫 (九大・熱研セ)

平尾台は北九州市の南部から周辺地域にまたがる標高 370m~710m のカルスト台地で、台上面積約 12 km²の大部分は結晶質石灰岩からなる。最高峰は貫山 (712m) で、周辺にはいくつかの鍾乳洞が点在する。ここでは、草原植生を維持するために、毎年早春の 3 月頃に野焼きが行われているが、カルスト地形特有のすり鉢型窪地であるドリーネには貧弱ながら森林環境が残存している。

筆者らは 2010 年の早春から秋にかけて、アリ類について半自然環境における人為的攪乱の影響を見るため、平尾台の野焼きが行われている所とそれ以外の箇所でも野外調査を行ってきた。サンプリング方法はウィンクラー装置によるリター抽出法である。得られた標本を検した結果、特筆すべき種がいくつか見られたのでここに報告する。

(1) ツチクビレハリアリ *Cerapachys humicola* Ogata

本種は照葉樹林の林床に生息し、比較的まれな種である。本調査では、野焼きが行われない、

パッチ状に点在する小規模の森林林床から得られた。

(2) ヒメキアリ *Plagiolepis flavescens* Collingwood

草地～林縁部に生息し、石下などに営巣する種である。対馬や九州北部に分布し、九州本土からは、これまでに福岡県遠賀郡における記録（緒方，1986）があるだけである。本調査では、野焼きが行われない部分の草原の林床から得られた。

(3) ミゾガシラアリ *Lordomyrma azumai* (Santschi)

照葉樹林の林床の土中・石下・落枝中の空隙などに巣をつくり、比較的まれな種である。刺激を与えると、触角収容溝に触角をたたみ込み、体を丸めて擬死行動をとるなど、臆病な習性をもつことが増子・神成（1980）によって報告されている。本調査では、野焼きが行われない、パッチ状に点在する小規模の森林林床から得られた。

(4) キイロカドフシアリ *Myrmecina flava* Terayama

林床の土中に生息し、まれな種である。本調査では、野焼きが行われない部分の草原の林床から得られた。

(5) ハヤシナガアリ *Stenamma owstoni* Wheeler

林縁から林内に生息し林床の土中に営巣する、まれな種である。久保田（1988）は本種の巢から多量のリュウブの種子を見出していることから、幼虫は種子食の可能性があると報告している。本調査では、野焼きが行われない部分の草原の林床から得られた。

おわりに本調査に協力されたカセサート大学のワタナチャイ・タセン氏にお礼申し上げる。

[参考文献]

緒方一夫（1986）対馬および九州本土からのチビキアリ (*Plagiolepis*) 属について. *Pulex*, (74): 355-356.

久保田政雄（1988）ありとあらゆるアリの話. 講談社.

増子恵一・神成忠男（1980）ミゾシワアリ *Lordomyrma azumai* (Santschi) の新産地とその習性. *蟻*, (9): 5-6.

（編集部注：この原稿は2010年12月に投稿された。）

385 (Col.: Lucanidae) 沖縄本島における3月下旬にライトへ飛来したマメクワガタの記録

細谷忠嗣（九大・院・比文）

マメクワガタ *Figulus punctatus* は、腐朽材の中で一夫一妻の両親とその子供と一緒に家族生活（亜社会性生活）を営むクワガタムシであり、親成虫は幼虫の餌となる木屑を生産し、また外敵から防護するなど子供の世話を行っている（荒谷ら，1996）。本種の成虫は腐朽材中でほぼ1年中見られるが、灯火にも飛来する（岡島・山口，1988）。今回、筆者は沖縄本島北部において

3月下旬という春季の始めに本種がライトに飛来することを確認したので報告する。また、同時期に単独で腐朽材中にある成虫も確認しているのであわせて報告する。

- 1ex., 23. III. 2010, 沖縄県国頭村伊江林道, 筆者採集. 簡易ライトトラップにより採集.
1ex., 23. III. 2010, 沖縄県東村新川ダム, 筆者採集. ダム駐車場のライトで採集 (Fig. 1).
1ex., 23. III. 2010, 沖縄県今帰仁村乙羽岳, 筆者採集. 腐朽材より採集.

本種と同属のチビクワガタ *Figulus binodulus* は、3月下旬から6月上旬にかけて成虫の分散とペアの形成、そしてコロニーの創設が行われる(荒谷ら, 1996)。今回の2例の観察から、本種もチビクワガタと同時期の3月下旬に成虫の分散が行われていることが確認された。また、腐朽材中より単独で採集された成虫は黒色で十分に成熟した個体であり、この腐朽材には他の成虫および幼虫がおらず、本種の坑道も見られなかった。よって、この個体は単独でこの腐朽材に穿孔を開始したばかりで、まだ坑道を抜けていなかったものと思われる。本種は、ペア形成前の時点において、単独で腐朽材に穿孔を開始するものもいるようである。



Fig. 1. *Figulus punctatus* attracted to the light in the parking lot of the Arakawa dam in Higashi village, Okinawa.

本調査は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究若手研究 (B) (No. 20770069) の補助を受けて行った。

[引用文献]

荒谷邦雄・近 雅博・上田明良 (1996) 食材性甲虫における亜社会性. 親子関係の進化生態学 節 足動物の社会 (齋藤裕編), pp. 76-108. 北海道大学図書刊行会, 札幌.

岡島秀治・山口 進 (1988) 検索入門 クワガタムシ. 保育社, 大阪.

(編集部注: この原稿は2010年12月に投稿された.)

386 (Col.: Scarabaeidae) 沖縄本島北部における外来種ヤエヤマニセツツマグソコガネの記録

細谷忠嗣 (九大・院・比文)

ヤエヤマニセツツマグソコガネ *Ataenius picinus* は、近年琉球列島を北上している南北アメ

リカ大陸が原産の外来種であり、沖縄本島では中部の恩納村谷茶で 2006 年に初めて確認された (河原ら, 2008). 今回, 本種が北部の森林地帯である国頭村伊江林道にまで分布を拡大していることが確認されたので報告する.

1ex, 23. III. 2010, 沖縄県国頭村伊江林道, 筆者採集. 簡易ライトトラップにより採集.

本調査は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究若手研究 (B) (No. 20770069) の補助を受けて行った.

[引用文献]

河原正和・西野洋樹・川井信矢 (2008) 南西諸島におけるニセツツマグソコガネ属について. 鯉角通信, (16): 41-42.

(編集部注: この原稿は 2010 年 12 月に投稿された.)

387 (Hem.: Lygaeoidea, Rhyparochromidae) 福岡県から採集された 2 種の海浜性ナガカメムシ

澤田宗一郎 (九大・院・生資環・昆虫)

海水や夏の高湿, 乾燥などの影響を受ける海浜環境では, その環境に適応した特有な昆虫が生息している. しかしながら, そのような昆虫の多くは開発による生息環境の縮小・消失によって激減し, 絶滅が危惧されている.

今回, 福岡県の海岸砂浜から, 稀な海浜性ナガカメムシ 2 種を採集したので報告する.

Poantius lineatus Stål, 1874 アシナガカメムシ (Fig. 1)

11♂ 9♀, 遠賀郡岡垣町吉木・新松原海岸, 23. X. 2010, 澤田採集; 1♂, 福岡市東区奈多, 29. VIII. 2009 澤田採集; 17♂ 21♀, 福岡市東区奈多, 14. X. 2010, 澤田採集.

本種の分布は, 本州および九州から記録されているが, 海浜植生の破壊や環境悪化によって生息地が減少し, 環境省のレッドリスト (RL) では絶滅危惧 II 類に指定されている (林, 2006). 九州では宮崎県から採集記録があり (俵, 1970, 1977),



Fig. 1. *Poantius lineatus*, body length: 5.2 mm.

福岡県内でも、過去に故宮本正一博士によって福岡市西区能古島から本種が採集されているという。しかし、砂浜の整備によって生息地環境が変わったため、近年の能古島で本種は採集されておらず、2010年に同所に訪れた際も採集することはできなかった。体は長形で、前胸背前葉が発達する。脚が長く、地表を素早く走る。採集時には、成虫とともに齢期の異なる幼虫を複数観察した。今回、シバ類、コウボウムギ、ハマゴウ、カワラヨモギといった海浜植物の根際から採集されたが、寄主植物に関する知見は得られなかった。また、生息地内であっても、採集できた範囲はかなり限られていた。

Peritrechus femoralis Kerzhner, 1977 ハマベナガカ
メムシ (Fig. 2)

5♂ 9♀, 遠賀郡岡垣町吉木・新松原海岸, 14. X. 2010,
澤田採集。

アシナガカメムシと同様に、環境の悪化によって生息地が激減したため、RL では準絶滅危惧種に指定されている。北海道、本州、九州で確認されており(友国・林, 2006)、福岡県内では糸島市野北海岸から採集されている(宮本, 1987)。体は楕円形で、前胸背前葉と後葉のくびれは明瞭でない。体色は暗褐色で、頭部、触角、前胸背前葉、小楯板、各腿節は黒色。木片の下や植物の根際から採集された。



Fig. 2. *Peritrechus femoralis*,
body length: 4.8 mm.

本報告を行うにあたり、貴重な資料や助言を頂いた林正美教授(埼玉大学)、および採集に協力していただいた九州大学の奥寺 繁博士ならびに大原直通氏に深謝の意を表す。

[引用文献]

- 依 慧 (1970) 宮崎県北部のカメムシ [分布資料 I]. タテハモドキ, (5): 43-74.
依 慧 (1977) 宮崎県北部のカメムシ [分布資料 II]. タテハモドキ, (12): 1-37.
友国雅章・林 正美 (2006) 相模灘沿岸部の半翅類(昆虫綱). 国立科学博物館専報, (42): 285-310.
林 正美 (2006) アシナガナガカメムシ, ハマベナガカメムシ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック. 5 昆虫類(環境省編): 118, 178, 自然環境研究センター, 東京.
宮本正一 (1987) ナガカメムシ類雑記. *Rostria*, (38): 583-584.
(編集部注: この原稿は 2010 年 12 月に投稿された.)

388 (Hem.: Pentatomidae) アオクチブトカメムシ (半翅目: カメムシ科) によるゴール食行動

和智仲是 (九大・院・システム生命)

半翅目 Hemiptera の昆虫による虫こぶ (ゴール) の吸汁は 5 科から知られ (Sugiura & Yamazaki, 2009), 特にカメムシ科 Pentatomidae に属するカメムシによるものは, これまで以下の 3 例が報告されていた (Yamazaki & Sugiura, 2005): (1) トゲカメムシ *Carbula humeragera* (Uhler), (2) クサギカメムシ *Halyomorpha halys* (Stal) [Rider *et al.* (2002) によると中国東部, 日本, 韓国に分布するのは *H. picus* (Fabricius) ではなく *H. halys* とされている. そして, 安永ら (1993) は *H. halys* にクサギカメムシの和名を用いているため, ここでは Yamazaki & Sugiura (2005) で用いられている *H. picus* ではなく *H. halys* を用いた.], (3) チャバネアオカメムシ *Plautia crossota stali* Scott. ところが, 筆者は, 北海道石狩市において, カシワ *Quercus dentata* に形成されたタマバチのゴール上で, アオクチブトカメムシ *Dinorhynchus dybowskyi* Jakovlev によるゴールの吸汁と思われる行動を観察した. 本観察は本種によるゴール食についての初めての知見であると考えられるので, ここに報告する.

種名: アオクチブトカメムシ *Dinorhynchus dybowskyi* Jakovlev

採集年月日: 2009 年 10 月 28 日

採集者: 和智仲是

採集地: 北海道石狩市新港東三丁目

採集状況: *Synergus japonicus* Walker (膜翅目: タマバチ科: ヤドカリタマバチ族) に同居されている *Andricus kashiwaphilus* Abe (膜翅目: タマバチ科: ナラタマバチ族) の単性世代ゴールに口吻を挿入していた (Fig. 1).

採集地付近は, カシワが多く見られる. 筆者はカシワに形成されているタマバチによるゴールを探索中に, ゴール上で静止しているアオクチブトカメムシを発見した (Fig. 1). このゴールは木質部が発達しているため, *Synergus japonicus* に同居された *Andricus kashiwaphilus* の単性世代ゴール (Pujade-Villar *et al.*, 2002) と考えられる. 素手で掴み上げると, 口吻がゴール組織に挿入されているのが観察された. 口吻が, ゴールの外壁, 内壁のいずれまで到達しているのかは確認することができなかった. 捕食性のクチブトカメムシ亜科 Asopinae に属する本種は, 鱗翅目幼虫やハバチ類の幼虫を捕食する一方で, クヌギ, ケヤキなどの樹種からも恒常的に吸汁する (安永ら 1993). しかし, これまで植物上のゴールを吸汁することは知られていなかった. さらに, これまでゴールの吸汁を行うことが知られていたカメムシ科の種はすべて植食性で, 随意的ゴール食者であるが (Yamazaki & Sugiura, 2002), 捕食性のカメムシによる随意的なゴ

ール食行動の観察は初めての知見であると考えられる。本個体の得られたカシワのゴール以外の組織は褐色に紅葉しており (Fig. 1), ゴールには潜葉性昆虫に見られる”green island” (Engelbrecht *et al.*, 1969) に似た環境が形成されている。餌資源の少ない時期には, 本種はゴールを随意的に摂食している可能性がある。

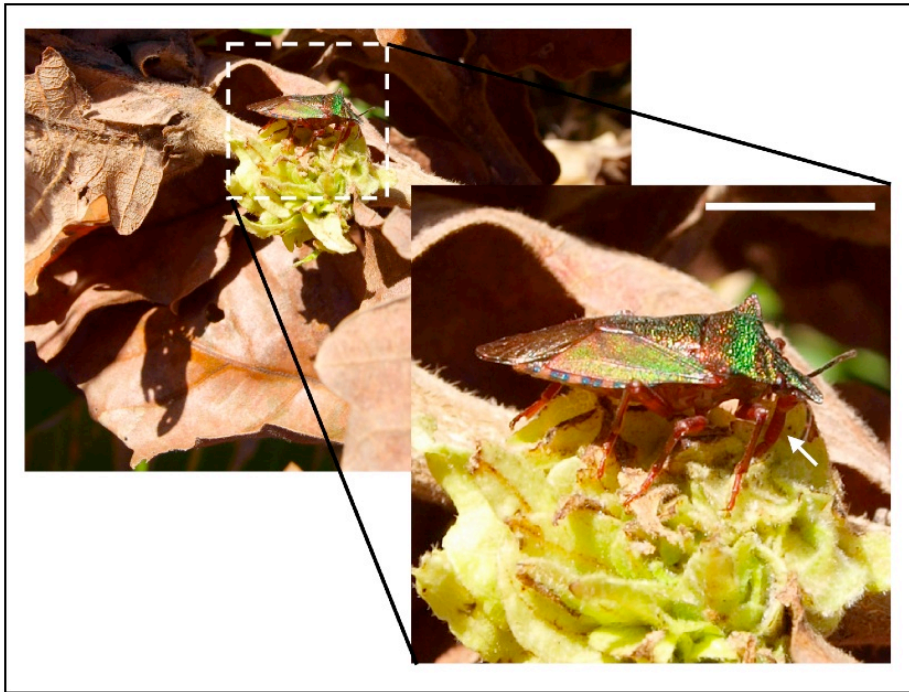


Fig. 1. *Dinorhynchus dybowskyi* Jakovlev on the asexual gall of *Andricus kashiwaphilus* Abe that fosters the inquiline gall wasp, *Synergus japonicus* Walker. The arrow indicates the rostrum inserted into the gall. (Scale bar: 10mm).

なお, 様々な助言をして頂いた九州大学の阿部芳久博士, 文献についての情報を頂いた森林総合研究所の杉浦真治博士に, この場を借りて厚くお礼申し上げます。

[引用文献]

- Engelbrecht, L., Orban, U. & Heese, W. (1969) Leaf-miner caterpillars and cytokinins in the green islands of autumn leaves. *Nature*, 223: 319–321.
- Pujade-Villar, J., Ros-Farre P. & Abe, Y. (2002) Biological and morphological differences of two closely related species of *Synergus* from Japan (Hymenoptera: Cynipidae). p. 278–281. Melika G. & Thuroczy C. (eds) *Parasitic Wasps: Evolution, Systematics, Biodiversity and Biological Control*. Agroinforma, Budapest, Hungary.

Rider, D. A., Zheng, L. Y. & Kerzhner, I. M. (2002) Checklist and nomenclatural notes on the Chinese Pentatomidae (Heteroptera). II. Pentatominae. *Zoosystematica Rossica*, 11: 135–153.

Sugiura, S. & Yamazaki, K. (2009) Gall-attacking behavior in phytophagous insects, with emphasis on Coleoptera and Lepidoptera. *Terrestrial Arthropod Reviews*, 2: 41–61.

Yamazaki, K. & Sugiura, S. (2005) Hemiptera as cecidophages. *Entomological News*, 116: 121–126.

安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫 (1993) 日本原色カメムシ図鑑. 友国雅章 監修. 360pp. 全国農村教育協会.

(編集部注：この原稿は2010年12月に投稿された.)

389 (Dip.: Hippoboscidae) シラミバエ2種の南西諸島からの採集記録

近藤雅典 (九州大・院・比文)

南西諸島に分布するシラミバエ類は、これまでに5属9種が記録されている (Mogi *et al.*, 2002; Yamauchi & Ozaki, 2007). シラミバエ類は、生活史のほとんどを宿主である野生哺乳類や鳥類の体表面で過ごしているため、採集される機会が少なく、その生態や分布に関する情報は極めて断片的である。今回筆者は、南西諸島において偶然に人体へと飛来したシラミバエ2標本を検査することができた。県レベルでの新しい記録ではないが、南西諸島のシラミバエ相を理解する上で、各島における生態・分布情報の蓄積が重要であると考えられるので、ここに報告する。

1. *Ornithoica exilis* (Walker) (Fig. 1)

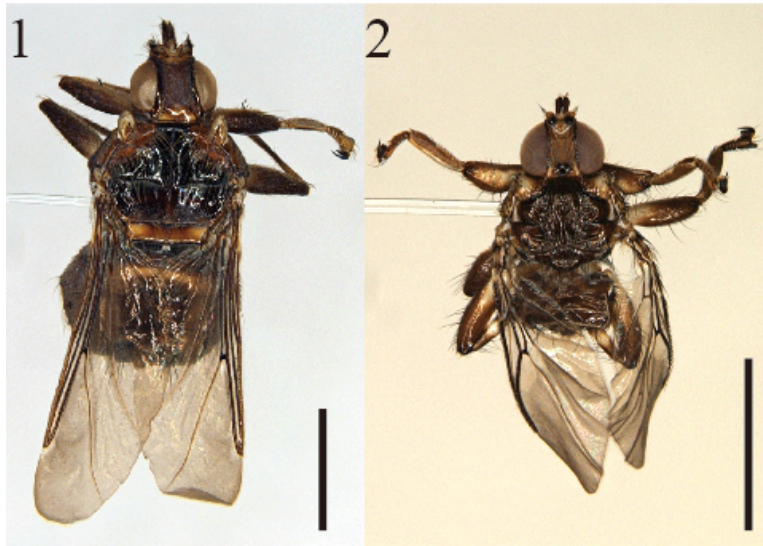
1♀, [沖縄島] 沖縄県那覇市末吉公園, 2009年7月2日, 近藤雅典採集.

本種は、南西諸島において沖縄島, 石垣島, 西表島に分布している (Mogi *et al.*, 2002; Yamauchi & Ozaki, 2007). 偶然的な人体への飛来は多くのシラミバエ類で報告されているが (例えば, 和智, 2009 など), 本種の人体への飛来は初めての報告である.

2. *Pseudolynchia canariensis* (Macquart) (Fig. 2)

1♀, [徳之島] 鹿児島県大島郡天城町三京川, 2005年5月25日, 中村剛氏採集.

Mogi *et al.* (2002) によると, 本種は南西諸島からは奄美大島, 沖縄島から報告されており, 本採集例は本種の徳之島における初記録である.



Figs. 1–2. Hippoboscidae flies collected from the Nansei Islands, in dorsal view. 1, *Ornithoica exilis*, 1♀, [Okinawajima] Sueyoshi-koen, Naha, 2.vii.2009, M. Kondo leg.; 2, *Pseudolynchia canariensis*, 1♀, [Tokunoshima] Mikyo-gawa, Amagi-cho, Kagoshima Pref., 25.v.2005, Koh Nakamura leg. Scale bars = 2 mm.

本稿の発表にあたり、*P. canariensis*の標本を提供していただいた中村 剛博士（台湾中央研究院）と、シラミバエに関する文献を提供していただいた中山裕人博士（九州大学）に厚く御礼申し上げます。

[引用文献]

Mogi, M., Mano, T. & Sawada, I. (2002) Records of Hippoboscidae, Nycteribiidae and Streblidae (Diptera) from Japan. *Medical Entomology and Zoology*, 53 Supplement 2: 141–165.

Yamauchi, T. & Ozaki, K. (2007) The louse fly *Ornithoica exilis* (Diptera: Hippoboscidae) collected from the Okinawa Rail *Gallirallus okinawae* (Gruiformes: Rallidae). *Journal of the Yamashina Institute for Ornithology*, 38: 97–99.

和智仲是 (2009) 長崎県五島列島野崎島で発見された九州初記録のクロシカシラミバエ. *Pulex*, (88): 523–524.

(編集部注：この原稿は2010年12月に投稿された。)

390 (Lep.: Crambidae) ライトトラップ中に耳に侵入した蛾

細谷忠嗣 (九大・院・比文)

2009年夏のトカラ列島調査において、ライトトラップ中に耳に蛾が侵入して鼓膜に張り付き、病院で除去してもらうという体験をした。その際、病院において鼓膜に蛾が張り付いている写真を撮影して貰うことができ、また張り付いていた蛾を持ち帰り、同定に廻すことができたのでここに報告する。

クビシロノメイガ *Piletochera aegimiusalis*

1ex., 28. VII. 2010, 鹿児島県十島村中之島大木崎, 筆者の右耳に侵入. 11. VIII. 2010, 福岡市南区長住の野上耳鼻咽喉科病院にて右耳から取り出す. 標本は神保宇嗣博士が保管中.

本種は、日本では本州から沖縄諸島にかけて広く分布する普通種である。

2009年調査は、棚橋薫彦博士（当時は東大，現産総研）及び土居朋嵩氏（九大）と共に中之島から調査を開始した。その調査初日の7月28日に行った大木崎でのライトトラップ中に、筆者の右耳の中に蛾が入り込み出られなくなり、耳の中で暴れ回るという事態が発生した。耳の奥まで入り込み、ピンセット等でも取り出せなかったため、やむをえず酢酸エチルを含ませた綿を入れた殺虫用の50mlチューブを右耳にしばらく押し当てて蛾を殺した。しかし、殺虫されるまでの数十分間にわたって右耳の中で盛んに暴れ回り、かなりうるさい状態が続き、まともに採集を行える状態ではなかった。さらに、死亡後も蛾を耳から取り出せず、右耳の中に違和感を感じたまま以後の調査（8月4日まで）を続けることになった。十島村の診療所は医師が常駐しているわけではなく看護師がいるのみであるため、処置は福岡に戻ってから8月11日に耳鼻咽喉科病院で行った。右耳の中を専用のスコープでチェックして貰ったところ、約1cmの蛾が鼓膜に張り付いた状態であった（Fig. 1）。筆者の右耳に14日間張り付いていた蛾を、専門器具を用いて慎重に取り出してもらい、その後、過酸化水素水で耳の洗浄が行われた。鼓膜に少々鱗粉が残ったが、無理にとると痛いとのことであり、また自然に取れるので問題ないとのことであった。



Fig. 1. *Piletochera aegimiusalis* stuck to the eardrum in the right ear of T. Hosoya.

ちなみに、ライトトラップ中に同様の体験をされた方は多いようで、いずれの場合も自分で取

り出すことができず、病院で処置してもらったとのことである。ライトトラップでの採集時には注意されたい。

末筆ながら、筆者の右耳に入った蛾の同定をして頂いた東京大学の神保宇嗣博士に御礼を申し上げる。また、耳に入った蛾の写真を撮影し、かつ適切な処置をして頂いた野上耳鼻咽喉科医院の皆様には感謝する。

(編集部注：この原稿は2010年12月に投稿された。)

原著論文掲載漏れのお詫び

前号 (Pulex No. 88) において、沢田佳久氏の投稿論文2編と奥寺繁・三田敏治両氏の投稿論文1編を掲載し忘れるというミスがありました。著者の皆様には大変なご迷惑をおかけしました。ここに支部事務局よりお詫び申し上げます。

「昆虫類の多様性保護のための重要地域 第4集」出版に向けて ：日本昆虫学会自然保護委員会からのお願い

日本昆虫学会自然保護委員会では「昆虫類の多様性保護のための重要地域」を、第1集(1998)、第2集(2000)、第3集(2002)と、これまでに3集を出版して参りました。出版後、約10年を経て、委員会では、新たな重要地域を追加すべき時期と考え、2011年中に「昆虫類の多様性保護のための重要 第4集」の出版を行いたい所存です。

つきましては、支部会員の皆様から九州・沖縄地区における重要地域の候補を広く募りたく存じます。候補地の選定にあたっては、第1～3集で扱われた地域(下記参照)と同レベルの重要性を持ちながら前回までに扱われていない地域で、高山、湿地など、あらゆる環境が対象となります。

なお、委員会では、特に、前集までは殆ど扱われていなかった環境として海岸線を重視する方針が決定されました。海岸線に関しては、最近の10年で砂浜の消失など深刻な環境悪化が報告されており、新たに追加すべき重要地域も多くあると考えられます。あらたな候補地域の選定にあたっては、この点にご留意いただけますと幸いです。

あらたな候補地域に関するご意見は、メール、Fax、葉書等で日本昆虫学会自然保護委員の荒谷(下記)までお寄せください。支部会員の皆様からのご意見をお待ちしております。ご協力の程、何卒よろしくお願い致します。(文責：荒谷邦雄)

参考：これまでの選定地域

第1集

英彦山（福岡県）
黒岳（大分県）
対馬（長崎県）
大崩山山塊（宮崎県）
奄美大島の中部山岳地帯（鹿児島県）
沖縄本島北部中央森林地帯（沖縄県）

第2集

男女群島（長崎県）
岩屋山（長崎県）
傾山（大分県）
白鳥山（熊本県）
尾鈴山（宮崎県）
霧島山北西部：栗野岳カシワ林と沢原高原（鹿児島県）
肝属山地・甫与志岳（鹿児島県）
屋久島：西部低山地樹林（鹿児島県）

第3集

今津長浜（福岡県）
多良山系（長崎県・佐賀県）
釈迦ヶ岳山地（福岡県・大分県）
猪八重溪谷・加江田溪谷地域（宮崎県）
与那国島樽舞湿原（沖縄県）

連絡先：荒谷邦雄（昆虫学会自然保護委員）

〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地 九州大学大学院比較社会文化研究院

TEL & FAX: 092-802-5647

araya@scs.kyushu-u.ac.jp, araya.kunio.927@m.kyushu-u.ac.jp

支部事務局からのお知らせ

2009 年度日本昆虫学会九州支部総会で決定された事項の報告

日本昆虫学会九州支部第 57 回大会（2009 年 12 月 6 日，於別府市「かんぼの宿 別府」）において開催された支部総会では，日本昆虫学会九州支部規約を一部改正し，支部事務局の所在を大会で決定すること，および支部事業として年 1 回の支部大会と例会を行うことが承認された。改正された日本昆虫学会九州支部規約は，本号の最後に全文を掲載したので，それを参照されたい。

また，会誌 Pulex の発行形態を改め，従来の印刷版の郵送から，PDF 版として会員に電子メール添付で配信し，希望者にのみ印刷版を郵送することに見直しが決定された。さらに，会誌 Pulex の PDF 版化に合わせて，当面支部会費を無償とし，その代わりに例会や大会に参加する会員から参加費を徴収し，活動費にあてることが決定された。

会誌 Pulex の PDF 版化について

前記の総会報告にもあるように，会誌 Pulex は今号より PDF 版として会員に電子メール添付で配信されることになりました。従来通りの印刷版（ただし，コピー製本になります）をご希望の会員は事務局までご連絡ください。今回の PDF 化により，印刷費・郵送費などの経費の大幅な削減，および郵送作業等の事務作業の軽減が図られました。また，投稿論文の写真や図のカラー化が可能となりました。PDF 版に対する御意見，御要望がありましたら，支部事務局までご連絡ください。

Pulex の原稿はいつでも受け付けております。投稿原稿がございましたら，本文を Microsoft Word 等で保存し，写真や図は JPEG や TIFF 等のファイルとして，事務局まで電子メールにて御投稿ください。印刷投稿も受け付けます。

連絡先：

館 卓司，または細谷忠嗣（九州支部編集幹事）

〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地 九州大学大学院比較社会文化研究院

tachi@scs.kyushu-u.ac.jp, hosoya@scs.kyushu-u.ac.jp

電子メールアドレス登録のお願い

会誌 Pulex の PDF 版は，メールアドレスが支部事務局に登録されている方のみ配信されます。九州在住の昆虫学会員でありながら現在九州支部に入られていない方で，会誌 Pulex の配信希望者が皆様の周辺に居られましたら，支部事務局までメールアドレス等の情報をご連絡頂けますようお願いいたします。

住所変更・電子メールアドレス変更のご連絡のお願い

支部事務局では、支部大会・例会の案内などの連絡事項を主に電子メールで配信しています。しかし、毎回多数のアドレスが配信不能で戻ってきてしまいます。このままでは、今号から開始された会誌 Pulex の PDF 版の電子メール配信が受信できない方がでてしまいます。電子メールアドレスを変更された方は速やかに事務局までご連絡ください。また、支部長選挙の際に必要なになりますので、住所変更についても事務局までご連絡ください。

日本昆虫学会九州支部仮ホームページの開設について

以前より要望のありました支部ホームページを下記の URL に仮作成いたしました。まだ、試作段階ですので皆様のご要望（大会・例会の記録、Pulex のバックナンバーの閲覧等）を取り入れながら、改良していきたいと考えております。どうか、ご意見・ご希望を広報担当幹事までお寄せ下さい。

URL: <http://entosockyushu.web.fc2.com/>

連絡先（広報担当幹事）

紙谷聡志 kamitani@agr.kyushu-u.ac.jp

2011・2012 年度の事務局体制

阿部芳久支部長より委嘱を受け、館 卓司（庶務，編集），細谷忠嗣（会計，編集），紙谷聡志（広報）の 3 名（敬称略）が支部幹事を務めることになりました。なお、事務局は引き続き九州大学大学院比較社会文化研究院に置かれます。

事務局の住所，連絡先：

〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地

九州大学大学院比較社会文化研究院

館 卓司（庶務幹事）

Tel: 092-802-5645

e-mail: tachi@scs.kyushu-u.ac.jp

日本昆虫学会九州支部規約

昭和 28 年 3 月 29 日 制定

平成 20 年 12 月 14 日 改正

平成 21 年 12 月 6 日 改正

- 第 1 条 本支部は日本昆虫学会九州支部と称する。
- 第 2 条 本支部は昆虫学の発展並に普及に寄与し更に支部会員相互の親睦を図ることを目的とする。
- 第 3 条 本支部の事務所の所在は大会で決定する。
- 第 4 条 本支部は下記の会員を以て組織する。
1. 正会員 九州に在住する日本昆虫学会会員。
 2. 準会員 本支部の趣旨に賛同するもの。
- 第 5 条 本支部に支部長 1 名幹事若干名を置き支部の運営に当らせる。
- 第 6 条 支部長は正会員の公選とし幹事は支部長の委嘱とする。任期は共に 2 年とし再任を妨げない。
- 第 7 条 本支部は次の事業を行う。
1. 年 1 回の支部大会（役員を選出・依頼・会務報告・重要事項の審議等を行う）及び例会を開催する。
 2. その他本支部の目的に適する事業を行う。
- 第 8 条 本支部の経費は支部会費を以てこれに充てる。本支部の会計年度は 1 月 1 日に始まり 12 月 31 日に終る。
- 第 9 条 本支部会費は年 1 回これを徴収しその金額は大会で決定する。

附則

- 第 1 条 本支部に準会員として入会希望のものは住所・氏名を明記し支部会費を添えて支部事務所に申込むものとする。
- 第 2 条 正会員の会費及び支部会費は支部事務所に払込むものとする。
- 第 3 条
1. 本規約は昭和 28 年 3 月 29 日からこれを施行する。
 2. 本規約は平成 20 年 12 月 14 日より改正・施行する。
 3. 本規約は平成 21 年 12 月 6 日より改正・施行する。

注) 平成 20 年 12 月 14 日の改正について

(旧) 第 6 条 ……任期は共に1年とし再任を妨げない.

(新) 第 6 条 ……任期は共に2年とし再任を妨げない.

注) 平成 21 年 12 月 6 日の改正について

(旧) 第 3 条 本支部は事務所を九州大学農学部昆虫学教室内に置く.

(新) 第 3 条 本支部の事務所の所在は大会で決定する.

(旧) 第 7 条

1. 年 1 回の支部大会（役員の選出・依嘱・会務報告・重要事項の審議等を行う）及び
数回の例会又は採集会等を開催する.

(新) 第 7 条

1. 年 1 回の支部大会（役員の選出・依嘱・会務報告・重要事項の審議等を行う）及び
例会を開催する.

注) 昭和 28 年制定の規約は旧字体での表記となっているが、今回の掲載においては新字体で表記した.

支部事務所 〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地

九州大学大学院比較社会文化研究院生物体系学教室

支部長 阿部芳久

庶務幹事 荒谷邦雄 (092-802-5647, araya@scs.kyushu-u.ac.jp)

編集 荒谷邦雄・細谷忠嗣

2010 年 12 月 31 日 発行 編集兼発行者 日本昆虫学会九州支部

郵便振替 01760-8-20101 加入者名 日本昆虫学会九州支部